論　文

保育者養成課程における学生の保育者適性に関連する要因
― 性格特性と子ども観の視点から ―

齊藤　範子[1)]　石川須美子[2)]

Factors related to Aptitude of Students in Training Courses for Early Childhood Educators: From the Perspective of Personality Traits and the View of Childhood

Noriko SAITO[1)]　Sumiko ISHIKAWA[2)]

【要　　旨】

本研究では、保育者を目指す学生の保育者適性に関与する要因として、性格特性と子ども観との関連を検討した。その結果、性格特性は、自分の考えや価値観を主張するよりも、他者に対してやさしく世話をすることを好み、情緒的であるという傾向が示された。保育者適性においては、共感的に関わることはできるが、論理的に物事を捉え、すぐに行動に移すことは苦手という特徴が認められた。子ども観においては、子どもはそれぞれが個性をもち、かけがえのないものだというポジティブな側面で捉えていることが認められた。また、保育者適性に関連する要因としてNPの特性を示すほど、人との情緒的コミュニケーションが成立しやすくなり、子どもをポジティブな側面で捉えることが保育者適性〈養育性〉因子と関連することが示された。

【キーワード】

保育者適性、性格特性、エゴグラム、子ども観

1．問題と目的

近年、保育者の専門性に関する研究において、保育者は知識や技術など能力的要素のみではなく、コミュニケーション力や忍耐力のような人間性が最重要視される専門職である（小笠原，2017）[1)]と述べられている。金子[2)]は、保育者の能力的適性と人間性（性格・態度的適性）は相互補完的な関係にありながらも、保育実践の遂行や成果と深く関連する表層の能力的適性の基盤として、内層の性格・態度的適性が比較

[1)] 別府大学短期大学部初等教育科　[2)] 別府大学文学部人間関係学科

的大きな効力を発揮しているものと考えられると述べている。

保育者の資質に関する適性として、伊澤ら[3]は、保育士を目指す学生を対象に保育者適性をあらわす22項目による質問紙調査を実施し、〈親和性傾性〉因子、〈自立傾性〉因子、〈共感傾性〉因子、〈規範傾性〉因子、〈教育傾性〉因子を確認している。また、藤村[4]は、性格に関する適性として、保育・教育行動に現れる保育者の傾向的特徴のことを保育者特性と呼び、この保育者特性を測定する「保育者適性尺度」を作成した。「保育者適性尺度（藤村，2010）」は〈愛他性〉因子、〈共感性〉因子、〈論理的思考性〉因子、〈気働き〉因子、〈社交性〉因子、〈行動力〉因子、〈養育性〉因子からなる構造であり、高い信頼性と妥当性が示されている。さらに青戸ら[5]は、「保育者適性尺度（藤村，2010）」の短縮版を作成し、先行研究とほぼ同じ因子構造を確認している。

保育者にふさわしい性格という観点からの研究も散見され始めている。林[6]は短大幼児教育学科の学生を対象に東大式エゴグラム（TEG）を用いて学生の性格特性を検討し、保育者を目指す学生の性格特性として「母親的な役割を担う養育的な親」や「子ども」の自我状態が多く、「父親的な役割を担う批判的な親」や「客観的かつ論理的にものごとを理解できる大人」の自我状態が少ないということを明らかにした。永房ら[7]は、伊澤ら[3]の作成した保育者適性尺度とBigFive性格特性および社会志向性、個人志向性との関連を検討し、外向性、誠実性、調和性と有意な相関、ポジティブな社会志向性、ネガティブな個人志向性と有意な相関を指摘している。藤村・石[8]は、保育者特性とYG性格検査との関連を検討し、総じてYG性格検査の情緒不安定的な特性とは負の、そして外向性に関する特性とは正の相関を有することを示し、保育者特性の全ての尺度は、YG性格検査の〈一般的活動性〉と正の相関をもち、保育者特性の〈論理的思考性〉を除くすべての特性が〈非協調性〉とは負の、〈社会的外向性〉とは正の相関を持つことを明らかにした。つまり保育者の性格特性は、協調性が高く、心身ともに活動的であり、対人関係に積極的であると述べている。

また、保育者としての性格や資質を検討するために「子ども観」「子どもイメージ」などのキーワードに基づいた研究も展開されている。「子ども観」とは「子どもをどのような存在としてみるか」という保育者側の視点に立っての理解であり、子ども観は幼児教育・保育の全体構造の基底にあって全体を支えているもので、保育者はより善く、より適した子ども観をもって日々の保育を構想し、実践することが要請される（田中，2008）[9]と述べられている。岡野[10]は、青年期女子の子どもに対するイメージを明らかにし、親準備性獲得の課題へ向けて保育教育の示唆を得るために、幼稚園児の母親の子どもに対するイメージと比較検討している。その結果、学生群は子どもを「かわいい」あるいは「うるさい」など一面のみを捉える傾向がみられたが、母親群では多様な子どもイメージを持っていることが認められ、良好な子どもイメージを持つためには、子どもの発達を理解したうえで、子どもを全体として捉える視点が重要であると述べている。

また、上長[11]は、保育者養成課程の学生の入学時から卒業時の子どもイメージの変容を検討し、養成課程の科目や保育実習を通じて、子どもの特徴や生活の様子に触れることによって子ども理解が進み、保育者としての子ども観や資質・能力が豊かになったことを報告している。子ども観をアセスメントする方法として、赤坂[12]は、20答法の枠組みを応用した「子どもは」で始まる10通りの文章を記述する「子ども観10答法」を考案した。その結果、〈子どもをどんな存在とみているか〉〈子どもに何を願っているか〉〈子どもにとって大切なことは何か〉という子ども観を把握する可能性を明らかにしたが、10個の回答の偏りについて、対象者の性格傾向や子どもとの関わりの経験、保育・教育観との関連があるのではないかと課題を残している。

前述したように、保育者適性や子ども観の特徴が明らかになってきたことにより、より質の高い保育・幼児教育に携わる保育者の養成が期

待されている。しかし、２年間という限られた年数の中で、保育現場で求められる実践力を養成することは非常に難しい課題である。その中で、現場で求められる知識や技術といった能力的要素だけでなく、パーソナリティ特性としての保育者適性を高めることは必須である。保育者を目指す学生の保育者適性と関連する要因を明らかにすることは、保育者養成のプログラムの開発に寄与できると考える。

本研究では、１）保育者を目指す学生の性格特性、保育者適性、子ども観を明らかにすること、２）保育者を目指す学生の保育者適性を高める要因を探ること、を目的とする。なお、保育者適性を高める要因としては、TEG で明らかにできる性格特性と子ども観を取り上げる。TEG を使用する理由として、可変的な性格特性を扱うものであるため、本人が変わりたいと思えば変更可能なものであることと、どの性格特性が保育者に適しているのかを探るのではなく、どのような性格特性の学生がどのような枠組みで子どもを捉える傾向があるかを知ることは、適切な保育・教育活動に寄与すると考える。

仮説は、次のとおりである。１）保育者養成課程の学生の性格特性は「世話好きでやさしい養育的親の自我状態」が高く、保育者適性の「共感性」に関連する。また、「大人の自我状態」は低く、保育者適性の「論理的思考性」に関連する。２）子ども観は、「ポジティブな側面」を捉え、保育者適性の「養育性」に関連する。

２．方法

（１）研究協力者

2022年10月に短期大学生117名を研究協力者として質問紙調査を実施した。そのうち欠損値のあった４名を除く113名（女性104名、男性７名、未記入２名）を本研究の対象とした。研究協力者の平均年齢は19.3歳（SD＝4.15）、希望する就職先は保育園27名、幼稚園37名、認定こども園33名、福祉施設等５名、その他11名であった。

（２）調査手続き

調査は、短期大学の講義内で実施した。調査に際しては、研究倫理をふまえ、参加は本人の自由意志であること、授業における成績の評価にはならないこと、得られた回答は調査以外の目的で使用しないこと、集団として統計的に分析することから個人が特定されるものではないことを説明し、回収時に提出したことで了解を得たものとした。

（３）調査内容

フェイスシートでは、性別、年齢、希望する就職先をたずね、最後に質問調査の感想を記入するよう教示した。測度は以下の３つを用いた。

１）新版 TEG３

エゴグラムとは、バーン（Berne, 1964）の交流分析理論に基づきデュセイ（Dusay,J.M.）が開発した質問紙である[13]。エゴグラムは対人交流におけるそれぞれの自我状態による心的エネルギーの状態が分かるようになっており、日本では東京大学医学部心療内科が開発した新版 TEG３が用いられている。「Critical Parent（以下、CP とする。）」は、批判的な親の自我状態、「Nurturing Parent（以下、NP とする。）」は、養護的な親の自我状態、「Adult（以下、A とする。）」は、大人の自我状態、「Free Child（以下、FC とする。）」は、自由奔放な子どもの自我状態、「Adapted Child（以下、AC とする。）」は順応した子どもの自我状態であることを示している。新版 TEG３では53項目５因子「CP」、「NP」、「A」、「FC」、「AC」を３件法（２：はい、１：どちらでもない、０：いいえ）で回答を求めた。また、妥当性尺度（以下、L 尺度とする。）が４点以上、疑問尺度（以下、Q 尺度とする。）が44点以上を示した対象者については信頼性が乏しくなるとされているため、分析対象から外すものとした。

２）保育・教育者適性尺度（青戸ら，2018）

パーソナリティ特性としての保育者適性を測定する調査に関しては、青戸ら[5]の28項目６因

子「共感性」、「行動力」、「養育性」、「気配り」、「社交性」、「論理的思考性」を５件法（１：あてはまらない～５：あてはまる）で回答を求めた。

３）新・子ども観尺度（髙橋ら，2015）

子ども観を測定する調査に関しては、髙橋ら[14]の28項目４因子「大切な存在（以下、大切とする。)」、「活発で純粋な存在（以下、活発とする。)」、「未熟で手のかかる存在（以下、未熟とする。)」、「能力を秘め、可能性のある存在（以下、能力とする。)」を６件法（１：全くそう思わない～６：とてもそう思う）で回答を求めた。その際に３～５歳の幼児期の子どもを想定するようにとの教示のもとで実施した。

３．結果

（１）保育者を目指す学生の、「性格特性」「保育者適性」「子ども観」について

１）新版 TEG３の結果

得られた113名の回答のすべてがＬ尺度もＱ尺度も条件の範囲内であったため、全てのデータを分析に使用した。全体平均を TEG３のプロフィール表にあてはめると、パターン分類は NP 優位型であった（図１）。このパターンは、人に優しく温かく接する、人の気持ちを理解する、世話を焼くという特徴を示している。各自我の状態に差があるかどうかを検討するために、１要因分散分析を行った（表１）。TEG３の結果について、統計的に有意な主効果が認められた（F（4, 448）＝16. 13, p＜. 001）。Bonferroni の多重比較を行ったところ、CP 得点が NP、A、FC、AC に比べて有意に低く、NP 得点が CP、A、FC、AC に比べて有意に高いことが示された。このことから、保育者を目指す学生の性格特性は、おっとりして友好的であり、思いやりがあり、親切で面倒見が良い一方で、ルーズでいい加減な所やけじめに欠ける面があるという特徴があることが認められた。

２）保育・教育者適性尺度と新・子ども観尺度の結果

各尺度の因子構造を確認するため、それぞれの因子についてクロンバックの α 係数を算出したところ、保育者適性は α＝. 72～. 87、子ども観は α＝. 76～. 90とすべての因子で十分な内的整合性が確認されたため、先行研究通りの因子構造を用いて分析を行った。

保育者適性の因子間に差があるかどうかを検討するために、１要因分散分析を行った（表２）。その結果、統計的に有意な主効果が認め

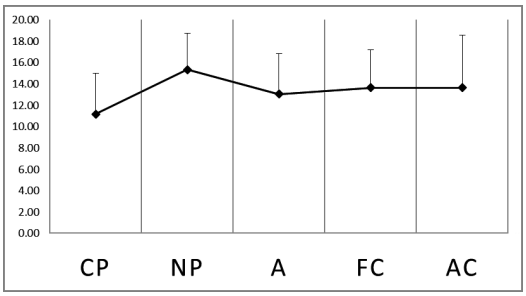

図１　TEG３のグラフ

表１　TEG3の各因子の比較

	CP	NP	A	FC	AC	F 値	多重比較（５％水準）
平均得点	11. 19	15. 35	13. 07	13. 65	13. 65	16. 13***	CP＜NP、A、FC、AC
SD	3. 80	3. 39	3. 78	3. 54	4. 94		CP、A、FC、AC＜NP

***p<.001

表２　保育者適性尺度の各因子の比較

	共感性	行動力	養育性	気配り	社交性	論理的思考性	F 値	多重比較（５％水準）
平均得点	4.18	3.54	3.95	3.79	3.17	3.49	29.72**	行動、気配り、社交、論理＜共感 社交＜行動＜養育 社交＜気配り 論理＜社交
SD	0.60	0.87	0.87	0.72	1.05	0.82		

*p＜.05, **p＜.01

表３　子ども観尺度の各因子の比較

	大切	活発	未熟	能力	F 値	多重比較（５％水準）
平均得点	5.64	5.35	3.65	5.45	256.18**	活発、未熟＜大切 未熟＜活発 未熟＜能力
SD	0.54	0.59	0.64	0.66		

*p＜.05, **p＜.01

られた（F(5, 672) = 29.72, p＜.01）。Bonferroniの多重比較を行ったところ、〈共感性〉因子が〈行動力〉〈気配り〉〈社交性〉〈論理的思考性〉因子に比べて有意に高いことが示された。〈行動力〉因子は〈社交性〉因子に比べて有意に高く〈養育性〉因子に比べて有意に低いことが示された。〈気配り〉因子は〈社交性〉因子に比べて有意に高く、〈社交性〉因子は〈論理的思考性〉因子に比べて有意に高いことが示された。

子ども観の因子間に差があるかどうかを検討するために、１要因分散分析を行った（表３）。その結果、統計的に有意な主効果が認められた（F（3, 448）= 256.18, p＜.01）。Bonferroniの多重比較を行ったところ、〈大切〉因子が〈活発〉〈未熟〉因子に比べて有意に高く、〈未熟〉因子が〈活発〉〈能力〉因子に比べて有意に低いことが示された。

（２）保育者適性と関連する要因について

１）保育者適性と TEG３の重回帰分析

保育者適性と性格特性の関連を検討するために、TEG３の５因子を説明変数、保育・教育者適性尺度の６因子を目的変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った（表４）。

その結果、保育者適性〈共感性〉因子を目的変数とした場合、NP（β=.374, p＜.001）と FC（β=.201, p＜.05）、AC（β=.245, p＜.05）から有意な正の値が示された。特に NP の特性を示すほど、人との情緒的コミュニケーションが成立しやすくなることが認められた。

保育者適性〈行動力〉因子を目的変数とした場合、CP（β=.424, p＜.001）と FC（β=.220, p＜.01）から有意な正の値が示された。つまり CP と FC の特性を示すほど、物事に自主的、積極的に取り組み、良いと思ったことは実行できることが認められた。

保育者適性〈養育性〉因子を目的変数とした場合、NP（β=.215, p＜.05）から有意な正の値が示された。保育者適性〈気配り〉因子を目的変数とした場合、NP（β=.206, p＜.05）から弱いながらも有意な正の値が示された。つまり NP の特性を示すほど、子どもの世話や援助することに労を惜しまず、人の些細な変化にも気づき、適切に対処できるようになることが認められた。

保育者適性〈社交性〉因子を目的変数とした場合、FC（β=.304, p＜.001）と NP（β=.193, p＜.05）から有意な正の値、AC（β=−.425, p＜.001）から有意な負の値が示された。この結果より、FC と NP の特性を示すほど、対人関係に積極的で人当たりが良く、気さくで相手を緊張させないで人と関わることができるが、AC の特性を示すほど、対人関係に消極的になり、自分の考えを表出しにくくなることが認められた。

保育者適性〈論理的思考性〉因子を目的変数とした場合、A（β=.593, p＜.001）から有意な正の値が示された。つまり、A の特性を示

表４　TEG3を説明変数、保育者適性を目的変数とした重回帰分析（強制投入法）

			目的変数					
			保育者適性					
			共感性	行動力	養育性	気配り	社交性	論理的思考性
説明変数	CP	(β)	.018	.424***	.198	.018	−.001	.139
	NP	(β)	.374***	.086	.215*	.206*	.193*	.083
	A	(β)	.171	.049	.178	.169	.006	.593***
	FC	(β)	.201*	.220**	−.093	.156	.304***	−.123
	AC	(β)	.201*	−.101	−.044	.142	−.425***	.045
	R^2		.260***	.444***	.198***	.117*	.405***	.435***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表５　子ども観を説明変数、保育者適性を目的変数とした重回帰分析（強制投入法）

			目的変数					
			保育者適性					
			共感性	行動力	養育性	気配り	社交性	論理的思考性
説明変数	大切な存在	(β)	.173	−.057	.354*	.402*	.032	.134
	活発で純粋な存在	(β)	.305*	.033	.008	.143	.056	.182
	未熟で手のかかる存在	(β)	−.094	.033	−.050	−.029	−.083	−.017
	能力を秘め可能性のある存在	(β)	.067	.220	.061	−.120	−.142	.018
	R^2		.262***	.064	.169***	.183***	.014	.099*

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

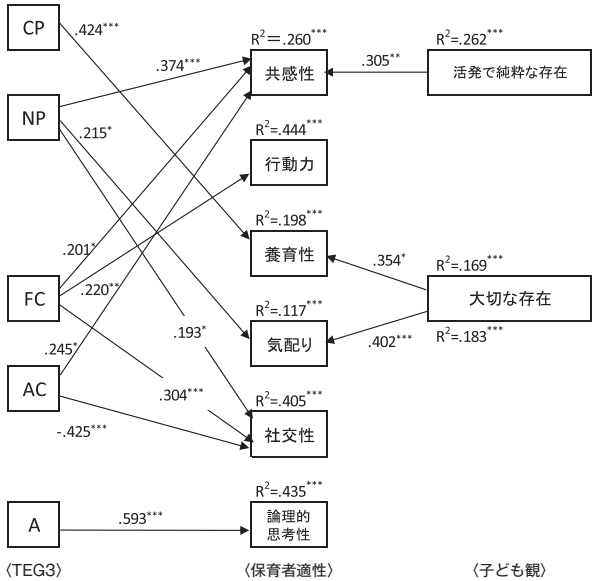

図２　各因子の関連

すほど、多面的に物事を捉え、理解しようと努力し、普遍的な理論や法則性などを基準に物事を認識しようとする傾向が強くなることが認められた。

２）保育者適性と子ども観の重回帰分析

保育者適性と子ども観の関連を検討するために、新・子ども観尺度の４因子を説明変数、保育・教育者適性尺度の６因子を目的変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った（表５）。

その結果、保育者適性〈共感性〉因子を目的変数とした場合、子ども観〈活発〉因子（$\beta=.305$, $p<.05$）から弱いながらも有意な正の値が示された。つまり、子どもに対して「素直で一生懸命」「無邪気で思ったことをストレートに表現する」「発想が豊かで自分なりの世界を持っている」と捉えることができるようになるほど、人の感情や気持ちを自分のことのように感じるようになることが認められた。

保育者適性〈養育性〉因子を目的変数とした場合、子ども観〈大切〉因子（$\beta=.356$, $p<.05$）から弱いながらも有意な正の値が示された。保育者適性〈気配り〉因子を目的変数とした場合、子ども観〈大切〉因子（$\beta=.402$, $p<.05$）から弱いながらも正の値が示された。つまり、子どもに対して「おもしろい」「保育者を成長させる」「かけがえのない」「一緒にいる人を元気づける」存在であると捉えることができるようになるほど、子どもの世話が適切にできるようになることが認められた。それぞれの因子との関連は図２のとおりである。

４．考察

本研究では、保育者を目指す学生の保育者適性に関与する要因として、性格特性と子ども観との関連を検証することに加えて、子ども観が保育者適性にどのように関連しているかを検討したところ、仮説１）２）ともに、一部が支持された。

（１）保育者を目指す学生の「性格特性」「保育者適性」「子ども観」について

１）性格特性について

保育者を目指す学生の性格特性については、NP が有意に高く、CP が有意に低いことが示され、自分の考えや価値観を主張するよりも、他者に対してやさしく世話をすることを好み、情緒的であるという傾向が示され、林[6]の先行研究と一致する結果が得られた。

林[6]は、「『母親的な役割を担う養育的な親 NP』は、保育者を目指す学生にとって望ましい資質と考えられる。しかし、行き過ぎると世話を焼きすぎたり甘やかしたり、過干渉になって子どもの自主性や自立性を奪いかねない。もう一方の『親』の自我状態である『父親的な役割を担う批判的な親 CP』が良くない NP の面を修正したり歯止めをかけたりする役割となる。厳しいことや制約することを敬遠しがちな風潮の中、優しいことやすべて受容することが必ずしもよいことではないということを学生が学び、そのような態度を身につけていくことが望まれる」と述べており、NP を維持しながらも CP を高める必要性が考えられる。

また、武藤[15]は、「AC の高い合わせすぎの表面的なやさしさは、未熟な段階であり、本来の自分から出るやさしさは、熟慮された思いやりへと成熟し、NP を頂点に CP と A が高く機能する」と述べており、他者を思いやる本来のやさしさを引き出すためにも、CP や A をある程度高める必要があると考えられる。

仮説１）に示したとおり、本研究においても世話好きで優しい養育的親の自我状態とされる NP は、他の自我状態よりも有意に高いことが示された。しかし、「大人の自我状態」とされる A は、NP 以外の自我状態と比較すると有意差はみられなかったことから、仮説１）の一部のみが支持された。

A の自我状態は NP 以外の自我状態との関係において有意差は認められておらず、保育者を目指す学生の性格特性として、A が極端に低いわけではないことが示された。A が主導権を握っているときは、P の偏見、C の感情がコ

ントロールされて、統合的で適応性に富み、創造性も高まる。そして自律性豊かな人間として活動できる[16]とされているため、Aがある程度バランスよく保有されていることは、客観的な心で現実を認識し、素直な感性で子どもと関わることができる保育者として非常に大切なことであると考えられる。

2）保育者適性について

保育者適性の特徴について、〈共感性〉因子が〈養育性〉因子以外の他の因子に比べて有意に高いことが示された。楽しいことやつらいことに共感的に関わることができる適性を備えていることは、子どもと接するうえでも重要である。

また、〈行動力〉因子が〈養育性〉因子に比べて有意に低いことから、養成課程で子どもに関する知識や保育技術は学んでいるものの、それが実行する力に反映されていないと解釈される。これは対象者が1年生であり、今後保育実習を重ねるうちに、自ら気づき行動に移す力が身についていくものと期待される。

〈養育性〉因子は、〈気配り〉〈社交性〉〈論理的思考性〉因子に比べて有意に高いことが示された。これは、子どもに対する思いが強く、子どもの成長のために世話をしたり援助をしたりすることで、よい影響を与えたいという傾向があることが認められた。

〈論理的思考性〉因子が〈共感性〉〈養育性〉〈社交性〉因子に比べて有意に低いことが示された。これは、子どもと情緒的に関わることは得意であるが、計画を立て、慎重に物事を進めていくことの苦手さが表れており、わからないことをわかろうと努力することや子どもの安全確保、保育の立案、園行事の遂行に関わる重要な因子であることが推測されるため、今後の保育者養成課程のなかで高めていく必要がある。

このことから、保育者を目指す学生のパーソナリティ特性としての保育者適性は、「人の気持ちに寄り添い、子どものことを優先的に考え、成長に必要な手助けをするなかで、子どもの気持ちの細やかな部分も読み取ることはできるが、すぐに行動に移し、論理的に物事を捉えることは苦手」という特徴があることが示唆された。

3）子ども観について

子ども観の特徴について、〈大切〉因子が〈活発〉〈未熟〉因子に比べて有意に高いことが示された。子どものことを、個性があり、好奇心旺盛でおもしろい、人を元気づけるといった情緒的な捉え方をしていると考えられる。

また、〈未熟〉因子は、他のすべての因子に比べて有意に低いことが示された。これは本研究の特徴的な結果であり、〈未熟〉因子の項目は平均点が低く、髙橋ら[14]の先行研究と同様にどの因子項目とも相関がみられなかった。髙橋ら[14]は、「(他の因子項目と相関がみられないのは）人間の持っている母性（親性）が影響し、子どもは能力的には非常に手のかかるものであるが、子どもを慈しみ育てようという母性動機が人間の基本的な欲求としてあるためである」と述べている。

また、原田[17][18]は「未熟な存在」の得点を高校生と保育短大生、母親と保育短大生で比較したところ、高校生と母親の得点が保育短大生よりも高かったことを報告している。高校生については、「保育の経験がなく、5歳以下の子どもをイメージでしか捉えていないのかもしれない」と述べ、母親については、「子どもを保護しなければならないという母性機能が強く表れた結果である」と述べている。上長[11]は、保育者養成課程の学びの中で、遊びの重要性や発達特性の理解が進み、幼児教育の本質に対する理解を深めることで、「子どもを一面的にみるのではなく、複眼的な視点」から理解しようとする保育者としての資質が高まると述べている。

これらの知見に対して本研究と照らし合わせてみると、子どものポジティブな面もネガティブな面も包括的に捉え「言うことを聞かないし手間がかかるけれども大切で愛おしい」という保育者自身がアンビバレントな感情と向き合いながら子どもを一人の人間として全体的なイメージを持つ必要があるといえる。つまり、保

育者養成課程の学生こそが、子どもを「未熟な存在」として捉える必要があるのではないかと考えられる。学生の感想の中に「(調査項目に)“子どもは大人の言うことを聞かない”とか“子どもは一人では何もできない”など子どもに対する印象の悪い質問があるということは子どもに対してこのようなことを思っている大人がいるのかと少し残念な気持ちになった」という内容が散見された。これは、保育者を目指す学生が子どもに対して「ネガティブな捉え方をしてはいけない」と思いこんでいるということが推測される。今後の課題として学生たちが子どもの快活性や可能性だけでなく、未熟性も含めて、ありのままの子どもの姿として捉えることができるようになる要因を探すことが必要であると考える。

（2）保育者を目指す学生の保育者適性を高める要因について

本研究では、保育者を目指す学生の特徴として、保育者適性〈共感性〉と〈養育性〉と〈気配り〉が高いことが示された。これらの因子に影響を与えているのは、性格特性でいえば、NP と子どもの自我状態であり、子ども観でいうと、〈活発で純粋な存在〉と〈大切な存在〉であった。現在、特に NP の高さは、彼らの長所として大切な側面として育てていくことが必要である。

保育者適性〈共感性〉因子に対して NP から有意な正の関連が示された。つまり NP の特性を示すほど、人の気持ちを大切にし、受容的であり、人との情緒的コミュニケーションが成立しやすくなることが認められたことから、仮説１）は一部支持された。また、FC と AC からも弱いながらも正の関連が示され、子どもの自我状態を高めることが、〈共感性〉を高めることにつながると考えられる。

次に、保育者適性〈養育性〉と〈気配り〉因子に対して、子ども観〈大切〉因子が弱いながらも有意な正の関連を示し、子どもをポジティブな側面で捉えることが〈養育性〉と関連することから、仮説２）も一部支持された。

一方で学生に不足している、保育者適性〈行動力〉と〈社交性〉と〈論理的思考性〉に関連している要因について考察する。〈行動力〉と〈社交性〉には、子どもの自我状態、〈論理的思考性〉には A が関連している。そこで、バランスよく保育者適性を高めるためには、子どもの自我状態と A を高めることが重要である。

〈行動力〉因子については、FC と関連することが認められた。FC は明るく行動的であり、自分の感情を素直に表現し、のびのび振る舞う傾向がある。子どもと関わる中で楽しく自由にのびのびと過ごすことができるのは重要である。また、安心して自分の思いを発信できる職場環境であれば、普段の保育はもちろん、災害などの緊急時においても発揮できる力であることが推測された。

〈社交性〉因子については、FC と正の関連、AC と負の関連が認められた。AC の特性を示す者は、依存心が強く、従順で他人に感化されやすい反面、周囲に合わせようとしすぎて主体性に欠ける傾向がある。したがって、〈社交性〉因子においても、AC 特性が活性化され、人と積極的に関わって関係性を深めていくことは困難であると認知されたものと推測された。FC や AC を高めるためには、興味のあることにチャレンジし、自分で考えのびのびと発言できるような場面を増やすことが重要とされ、保育に対して興味関心を持ち、主体的に学べるような授業の展開が望まれる。

〈論理的思考性〉は、全体のバランスを保つために重要な因子といわれており、A が関連している。保育者養成課程の短期大学生の性格傾向として A が低いことが明らかになっている[6]ことから、保育者（大人）として子どもと関わるためには、積極性や主体性を養うためにも、ある程度 A を高める工夫を養成プログラムの中で検討する必要がある。

影本ら[19]は、看護学生による臨地実習指導の評価について学生の性格特性の観点から検討したところ、「A は物ごとを客観的・理性的に判断し、CP はそれに基づいて行動する力を示しており、病態を分析し、看護の根拠を明確にす

るにはA・CPを高める必要がある」と述べている。また、飯田[20]は専門職業人として理想の看護師のエゴグラムを「NPがAよりやや高いか、あるいは同じ値で頂点を示し、職業人としての価値観信念を表すCP、さらにありのままの私を示すFCが高い“への字型”」と述べており、専門職業人として子どもと関わる保育士もAを高めていくことが大切である。さらに、武藤[15]はAがFCやACより低い学生において、不安傾向が強く、外的刺激による影響を受けやすくストレスを生じる可能性が高いと述べていることからも、自分の感情をコントロールし、客観的に物事を捉えるようになる力が必要である。

Aを高めるために、教員は学生の良いところや強みとなる部分を評価し、保育の基礎的な知識を実習で子どもにどのように適応するか考えられるような、「保育を展開する力」をもたせることが大切である。また、実習園と連携して学生が自発的に保育実習に参加できるように、保育の活動内容を授業でわかりやすく示し、学生の不足するところを補いながらも、学生に「自分でやれている」感覚と、困難な状況においては自ら援助を求める姿勢をもたせることが、バランスの良い保育者を養成していくために必要であると考えられる。

（3）今後の課題

今回TEG３を学生全体の平均得点で分析しているため、全体的な傾向でしか性格特性を捉えることができなかった。今後は一人ずつのプロフィールを分析し、希望する者には自己変容の手助けとなるようなフィードバックを行い、保育者適性を高めていくサポートを通して、保育者適性がどのように変化したか、縦断的に検討する必要があると考える。

また、先述したように、子ども観の「ネガティブな捉え方をしてはいけない」に関する要因を探すことも課題である。先行研究では、「子どものポジティブな側面を捉えられるようになった」という内容のものは散見されるが、ネガティブな捉え方をしてはいけないと思い込んでいる要因、つまり認知バイアスの側面について触れたものは見当たらない。それを明らかにすることにより、子どもを包括的に捉える視点が身につくためのアプローチ方法を明確にすることができると考えられる。

謝辞

調査にご協力くださいました学生の皆様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

1）小笠原文孝・野﨑秀正・大坪祥子・﨑村英樹・木本一成・﨑村康史・潟山樹里・石井薫，保育現場の視点から捉えた「保育士の専門性」議論の再考，保育科学研究，2017；8：84-92
2）金子智昭，保育者の専門性再考―「保育者における適性の同心円モデル」の構築―，応用教育心理学研究，2020；38(1)：77-94
3）伊澤永修・永房典之・星道子，保育者適性尺度の試み，東京文化短期大学紀要，2007；24：5-10
4）藤村和久，保育士、幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成，大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要，2010；9：129-143
5）青戸泰子・田邊資章・山田麻美，保育・教育者の資質に関する一研究―保育・教育者適性尺度の検討―，関東学院大学人間環境学会紀要，2018；29：9-18
6）林悠子，幼児教育学科学生の性格特性について，奈良文化女子大学紀要，2007；38：151-160
7）永房典之・伊澤永修・岩切信一郎・星道子，保育者適性に関する研究(2)：BigFive性格と個人・社会思考性からの検討，東京文化短期大学紀要，2008；25：1-3
8）藤村和久・石暁玲，保育者特性検査の妥当性Ⅱ―育児不安、自己観およびYG性格検査との関連性―，大阪樟蔭女子大学研究紀要，2013；3：63-71
9）田中正浩，「子どもをありのままに見る」ことの意味を考える，日本教材文化研究財団研究紀要，2008；37
10）岡野雅子，子どもに対するイメージ―女子学生と幼稚園児母親との比較と保育教育への示唆―，信州大学教育学部紀要，2003；110：57-67
11）上長然，保育者養成課程における「こども」イメー

ジの変容～入学から卒業までの経年的変化～，近畿大学豊岡短期大学論集，2011；8：35-41
12）赤坂澄香，「子ども観」のアセスメント方法の開発に向けた基礎的研究―心理学的技法を応用して―，有明教育芸術短期大学紀要，2022；13：57-66
13）東京大学医学部心療内科 TEG 研究会，新版 TEG ３マニュアル，金子書房，2019
14）高橋淳一郎・岩崎桂子・河村裕次，子ども観尺度における因子構成の検討―新・子ども観尺度の作成―，国際幼児教育研究，2015；22：39-48
15）武藤眞佐子，本学学生の性格特性とエゴグラムの特徴―２年次学年末における CAS 不安因子得点毎エゴグラム―，岩手女子看護短期大学紀要，1996；4：17-31
16）東京大学医学部心療内科，エゴグラム・パターン―TEG 東大式エゴグラム第２版による性格分析，金子書房，1995；26
17）原田博子，幼児教育科短大生の子ども観：高校生との比較，筑紫女学園短期大学紀要，2002；37：97-114
18）原田博子，幼児教育科短大生の子ども観―母親との比較―，筑紫女学園短期大学紀要，2003；38：35-54
19）影本妙子・近藤栄律子・曽谷貴子・太田栄子・藤堂由里・中西啓子，看護学生による臨地実習指導の評価―学生の特性に焦点をあてて―，川崎医療短期大学紀要，2010；30：17-22
20）飯田眞佐子・金井ヒロ・尾岸恵三子，エゴグラムから見た看護婦の成熟性について，看護展望，1986；11(9)：34-41